

---

# 桜媛

藤堂阿弥

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜媛

### 【Nコード】

N9692R

### 【作者名】

藤堂阿弥

### 【あらすじ】

表向きは教師と生徒の恋愛物ですが、複線はりすぎて何がなんだか分からないストーリーと成り果てております。それでもよろしければ、ご覧下されると嬉しいです。舞台設定は「One Pass ion」と同系列。見知った名前もちらほら出てきます。ジャンルを変更させていただきました。

## 序章（前書き）

こちらは以前別のサイトでオリジナル化した二次製作を、完全オリジナルとして書き直した作品です。

どこかでお目にかかった方にも新たな話として楽しんでいただければ幸いです。

## 序章

それは、呪か言祝か。

ある者は、自分達が封じた『モノ』たちの怨嗟だといひ。

また、ある者は神々からの祝福だといひ。

悪戯に血を広げぬように、という始祖の戒めだと言つ者もある。

一生一対。

両翼にて一羽の鳥があるごとく。彼らの血族が愛するのは生涯唯一人。

巡り会えた喜びは、何に勝るものはない。

しかし、喜びと悲しみは表裏一体。

喪つた悲しみは人の心で受け止めるにはあまりにも重く、苦しいものだという。

それでも彼らは探すのだ。

己が心の求めるままに、本能で、そして埋められぬ『何か』を探すために。



## 一話

両親の『里』に来たのは久し振りの事だった。

遠縁の若い少女が亡くなったと聞かされて、父と母は取るものも取りあえず、この里に来た。

母と少女の母親は幼馴染で。

父と少女の父親は古い友人で。

だから、本来なら来る必要は無かったのだけど。

大学も受かって、これといってやる事がないのなら一緒に来いと言われて。

そして、やってきたその地は、一面の桜に覆われていた。

元気な子供だったと聞いた。

近くの子供達と遊んでいたら、川に流されている子犬を見つけて助けに入っただと。

春とは言えまだ寒い。そんな中、濡れた服も乾かさずに助けた犬と日が暮れるまで遊んで。

…熱を出して、あとはあつという間だったという話だった。

犬を助けなければ…。

濡れた服をすぐに着替えに帰っていれば…。

誰もが思うことであっても、親族は誰もそんな事は口には出さない。

何故なら、みな知っているから。

人は生きるのも亡くなるのも意味があることを。

その『能力』故に。その『生業』故に。

そして、その犬は少女の家で飼われる事になった。

大型の日本犬と洋犬との雑種と思われるその犬は明るい茶色の体を持ち、将来を想像させる太い足を持っていた。

今は、少女の小さな弟の傍ですやすやと眠っている。

この犬がここで生きていくのも、何か意味があるのだろうか。

一族に生まれながら、今だこれと言った『能力』が現れない自分には良く分らないが……。

出なければ出ないでいいと、思うようになったのは最近の事で。

ただ、なんの『力』も無いのに、『鬼見』の才はあるらしく、そのテのものはしょっちゅう見るが、眼鏡をかけていれば、見ることも無いと気が付いて、かけ始めたのは何時のころだったろう。

小さな影が外に向かったのに気が付いて、通夜の席から立って外に出ると、少女が空を見上げていた。

亡くなった少女の双子の妹。

生来からだが弱く、その為家族と離れてこの里に暮らしているという話だった。

ゆらり。

ゆらりと、少女の腕が上がる。

ああ。

そういうことか。

ああ。

そういうことだったのか。

なんの躊躇いもなく、自分の中に突然沸き起こった知識。誰に教えられる事も無く。誰に語られる事も無く。

ただ、自分もこの一族だと言う事を自覚して…思い知って。そして、湧き上がる歓喜。

ゆらり……と、少女が光に包まれる。

「もともと、一人しか生まれなかったはずなのよ」

母の声がして振りかえると、何時の間に出てきたのか一族が皆集まっていた。

「それが、双子になっていてね」

そういいながら、優しい瞳で自分の息子を見上げた。

「貴方の『力』は『護り』だったのね」

二人とも『癒し』だったから、てっきり貴方もそうだと思いこんで



いたわ。

だから、いくら待っても『出て』来なかったわけね。  
くすり、と笑うと母は少女の方へと視線を移した。

「見ておきなさい。二つに分かれていた魂が一つに戻って行くわ」

ゆらり      光は少女を包み、ゆつくりと少女の中へと消えて行く。

「無意識…か」

笑いを含んだ声で言う祖父の言葉に、振り向くと少し困った表情をしていた。

「無意識でここまで見事な結界を作り出せるのか、お前は」

え、と気が付いてその結界を解くのと、少女が倒れこんでくるのが  
ほぼ同時で。

慌てて手を差し出すと、幼い身体を抱きとめた。

「『桜の媛』と『護り人』・・・か」

抱き上げた少女を連れて家に入ったその耳に、呟くような祖父の声  
は聞えなかった。

そして、彼がこの里を去るとき。

彼の記憶からは一族の能力も己の能力も。

綺麗さっぱり忘れていた事に本人は気が付いていなかった。

そして、いつしか時は過ぎ

男は4月から自分の受け持ちになる生徒の資料を確認しながら、数少ない外部の中学から入学してくる一人の少女の内申書に目を留めた。

父親の転勤と共に来た彼女の住んでいた地域は、偶然にも自分の両親の出身地の近くだ。

「…しかし」

微かに眉を顰め、書類を見て軽く息を吐く。

総合評価は申し分のない成績だ。理数系を除けば。

この学校は成績だけで生徒を合格させるわけではない。言い換えれば、学科試験だけでは合格するのは難しかったであろう成績。

「楽しみだな」

彼を知る生徒達が見れば青ざめる。  
そんな笑いを浮かべた男であった。



## 二話

私立西陵学園には、オーケストラ部なるものがある。

特別音楽に造形が深いわけではない、ただ最初に同好会として始めたメンバーが、弦楽四重奏だった事に端を発する。

彼らの音に惹かれて集まったメンバーは、弦楽器の奏者が多く、自然とこの形になったらしい。

そして、今、この部活の顧問が、氷室 ひむろ 暁 あきひ なる男であった。

かといって、彼は音大の出身者という訳ではなかった。

数学教師である彼が、この学園に新卒でやって来た時、オケ部の顧問が彼の母親の音大時代の大先輩で公私共に彼自身も世話になった相手だったからである。

定年を間近に控えた相手を手伝ううちに済し崩しに顧問も引き継いでしまったのだ。

相手は暁を幼少の頃から知っている。彼が音楽家の両親の影響で絶対音感と共に、部員達のちょっとしたミスや、普段との音の違いを聞き分ける『耳』を持っていることに気付き、彼に後を任せたのである。

：しかし、この場合、問題は任された側ではなく、指導を受ける生徒達にあった。

問題、というより災難だ。

自分にも他人にも同様に厳しい男の指導は半端なものではなかった。事実、オーケストラ部は指導についていけなくて、半数近くが辞めていったのだ。

残された者たちが必死に食らいついて行った成果は確実に現れ、わずか二年で西陵校オケ部は全国大会へと進出したのだ。

そこは、学園のはずれにある雑木林のさらに奥まったところであり、めったに人が訪れないところでもあった。それゆえ、氷室は一人になりたい時や考え事がある時にはよくここにやってきていた。

ここには、何故か一本だけ枝垂れ桜があり、この季節ひっそりと人知れず花を咲かせていた。かなり古いその木は、先代の理事長の言いつけで切らずに残されているという話を聞いたことがあった。

と、微かに伝わってきたその音色に、彼は眉を寄せる。

拙いその音は聞き覚えのあるもので、果して木の影からその姿が見えたときは彼は溜息をつかずにはいられなかった。

数は少なくあるが、何人か入って来た外部入学の一人であるその少女は、奇しくも氷室の受け持つクラスの生徒であり、また彼が指導するオーカストラ部の部員でもあった。

「ここで何をしている？」

一心にフルートの練習をしていた少女は突然かけられた声に一瞬身

を竦め、顔を上げた。

「あ、氷室先生」

「質問に答えなさい。ここで何をしている？」

「え…っと、フルートの練習です」

見ていれば分かりそうなものだが、ここにそれをつ突っ込むものは居ない。勿論、当の本人達さえも。

良くも悪くも凡庸な少女。

それが、氷室の五木咲良という少女に対する評価であった。

「それは、分かっている。私が聞きたいのは、何故休みの日に君がここににいるのかだ」

ああ、と、思わず『ポン』と聞えそうな様子で少女は手を叩くと、少し恥ずかしそうな顔で顧問を見上げる。

「家でやると弟が嫌がるんです、近所迷惑だって…：ここなら人気も無いし、校舎から離れているから迷惑にならないかな、って思っています」

フルート初心者の彼女の音はお世辞にも聞いていて心地の良い音を出すとは言い難かった。いや、どちらかと言うなら耳障りというべき音である。だが、元々篠笛を嗜んでいた、という本人の言葉どおり、初心者にしてはまともな音を出すほうだ。だからこそ、募集人数の少ないフルートというパートに合格したのだ。

だが、それを口に出して褒める氷室ではない。

「なにもこんなところでやらなくても音楽室はある程度防音は効いているだろう？他にも視聴覚教室なり、準備室なりあるだろう？」  
人気の無い所と言うのは、裏を返せばめったに人が訪れないと言う事でもある。

「もし、なにかあったらどうするつもりだ？」

学校の敷地内で何かあるほうが問題なのだろうが、一応他所のお宅のお嬢さん方を預かっている方の立場としては注意を促すのも当然といえよう。しかし、言われた当の本人は、なんの事かと首を傾げている。

「それに、気持ちが良いんです、ここ」

自分の目の前に下りてきている花を手にとって、少女は微笑む。

「綺麗ですよね」

少女の言葉に氷室も顔を上げ、満開に咲き誇っている花を見る。

しばらく、二人とも声も無く桜に見入っていた。

微かな衣擦れの音に氷室はそちらの方を向いた。

見ると少女がフルートを片付けて、立ち上がっていた。

氷室の方を向いて、軽く頭を下げる。

「それじゃ、私帰ります。失礼します、氷室先生」

「待ちなさい」

自分の傍を通りすぎて行こうとする少女を呼び止めると、氷室は自分でも思っても見なかった言葉を紡いだ。

「校門の所で待っていなさい。送って行こう」

驚いたように目を見開いた咲良であったが、ふるふると首を振る。

「そ、そんな、そんなご迷惑はおかけできません！今日だって私が勝手に学校に来たんですし……」

「かまわない、君の家は私の帰路にある」

そう言うと、氷室はきびすを返し、校舎へと向かって行った。後に残された少女は、その姿が見えなくなると、大きく息を吐いて桜をみあげる。

「うつ…氷室先生に送ってもらうなんて……」

緊張するなあ…と、呟きながら校門へと向かう。

高い身長、整った容姿、若くて独身。

普通に考えれば、女生徒に人気のあるはずの氷室だが、中等部から持ち上がったきた友人に言わせると、あくまで『観賞用』なのだそうだ。

「当たり前的事」をモットーとする、西陵学園内で、それをより明確化させる存在。

それが、氷室 暁なる人物だ。

常に厳しい口調と物言い。決して間違っではないと思うが、やっぱり怖いと思う。

厳しいけれど怖いだけの人ではない、と思う。怖いけど…うん、や



っぱりすごく怖いけど。

でも、こうやって学校に来ている自分に気が付いて送って行ってくれるというのだから、きっと親切な先生なのだろう。

「そういえば」

ふと気が付いたように咲良は呟いた。

「氷室先生、あそこに何の用だったんだろう？」

学校のはずれにある場所なのだから、用がなければ来る所ではない。

「ま、いいか」

今度機会があったら聞こう。などと思っていた少女は、自分の目の前に来たスポーツタイプの左ハンドルの氷室が運転して来たことにより、すっかり考えていた事を忘れる事になる。

### 三話

期末試験結果発表の日。

咲良は青褪めた顔をして順位表を眺めていた。

「五木…お前」

「あ、岸本くん」

呆れたような声に少女は泣き笑いの笑顔を見せた。

同じ外部入学の少女と友達になって、彼女を介して知り合った隣のクラスの少年。

「赤点3つ……補修だな」

「うつつ…」

「理数系全滅」

「うつつうつつ……」

「咲良ちゃんってば…岸本くんに近いくらい極端」

岸本と、同じクラスの日向 亜衣が声を掛ける。

文系だけなら学年トップの点数を誇る岸本だが、理系が見事に足を引く張っている。

かといって、赤点を取っているわけではない。

「文系だけなら、浅野と良い勝負なんだけどな」

文系トップの女子の名前を挙げて、岸本は苦笑を向ける。

「…ま、頑張れ。誰にでも得て不得手はある。ウチの学校が厳しいとは言え、温情が無いわけじゃないからな」

「頑張る」

小さくガッツポーズを取る少女に友人達は生暖かい視線を送るのであった。

補修初日。

ガラリ

入って来た氷室を見て、教室が静まり返る。

補修が始まり、一人一人にプリントが手渡された。

ふと、手渡されたプリントを見て、咲良は違和感を感じた。隣に座っている相手のプリントを見て驚きが変わる。

一人一人違うプリント。

たしかに、それぞれにそれなりに補修科目は違うのだろうけれど。周りを見渡すと、皆驚いたような顔でプリントを読んでいる。と、いうことは一人一人に補修用のプリントをつくったということだ。

確かに、今回のように三教科赤点などというのは少数ではあるが、だからといって、決して少ない量ではなかっただろうに。

「とりあえず、やれる所から始めなさい」

”とりあえず”そういわれて、埋めれるところから、埋めていく。

決して言い訳にするつもりは無いが、自分の通っていた中学とこの学校では、レベルがかなり違う。この学園を選んで手続きをしたのは全て両親で、言われるままに入学試験を受けたのだ。高等部への入学がとてつもなく狭き門だとは知らず、入試風景もこんなものだと気にもしていなかったのが事実だ。

この学校が、中等部からの持ち上がりで、高等部からの入学がほんの一握りの

数だと知ったのは、入学後。よく、合格したものだと思っても思う。不正を嫌い、当たり前をモットーとする学風を知らなければ、どこかで誰かが画策したのではないかと疑ってしまっただろう。

先の試験でも解る様に、文系では決して引けをとらない彼女の成績である。中学の成績だとて、悪くはなかった。

まあ、理数系に多少苦手意識はあったのだけど。

「君の場合」

静かな声が、頭上から降ってきた。

「前に通っていた中学と、はばたき学園の中等部では、教科書や進み方が違っていたと思われる。持ち上がりの関係上どうしても中等部のレベルでテストを作ってしまうからな」

顔を上げると、厳しくはあるが、どこか温かさを感じる眼差しがあった。

「他の科目の点数を見ても、決してできないとは思えにくい、少しずつ追いゆくように」

「はい」

思わず、力いっぱい頷いてしまう。

再びプリントに目を移す彼女を、氷室は微笑して見つめた。

「解らないところは遠慮なく訊きなさい」

専門外であつても氷室の説明は解り易かつた。

それは、一を訊いて十知る天才肌の教え方ではなく、きちんと順番を通して理解させる教え方であり、教えるほうがより知識を必要とするもの。

ただ、この時点での咲良がそれを知るはずがなく。

ただただ、氷室の教師としての姿勢に感心するばかりであつた。

## 四話

解いていく楽しみが解ってくれば、学ぶことも楽しくなる。

数学のプリントを埋めながら、咲良はそう思った。  
解らなかった問題がどんどん解けていく。

つい、夢中になって、気が付いたら、辺りには誰も残っていなかった。

「あ…」

窓際に腰掛けている氷室に気が付いて、咲良は小さく声を上げ、はつとしたように口元を抑えた。

「氷室先生…眠っちゃってる」

日ごろの彼からは想像もつかない優しげな寝顔に、少女は目を細める。

「疲れているんだろうなあ」

「ごめんなさい、と小さく呟く。」

「そうだよねえ、こつやって一人一人違う問題作って、補修に付き合っているんだもんね」

相手が起きないと、自然大胆な行動に出てしまう。

普段、厳しい視線と言動で周囲から遠巻きにされてしまう氷室だが、今はその両方とも閉じられ、端正な横顔はとても穏やかな印象を与える。

嬉しくなって、もう一步近付いて目の前の担任であり顧問の顔を見下ろした。

いつもは、見上げなくてはいけない相手の顔が、自分より下にあることに、ちよつとした感動を覚えながら、口元を緩める。

「不思議だな…こつやって見ると、そんなに怖い先生に見えないんだけどな」

近くの席に腰を下ろし、咲良は氷室の方を見て微笑む。

「分かっているんだけどな…厳しいのは私たちの事を思ってくれてるってのは…」

でも…、と少女は心の中で呟く。

分かっているても、怖いものは怖いんだよね。

氷室を見ているうちに、知らず知らず眠ってしまったらしい。

氷室に起こされて、すでにチェックの終わっているプリントを手渡される。

出来はいまいちだが、丁寧に添削され、間違えた原因のポイントま

で記されていた。

一足先に教室を出ようとした氷室が、気が付いて振り返る。

「すみませんでした、先生。私が終了に気が付かなかったから、お帰りになれなかったんですね？」

少女の言葉に少し驚いたように目を見開いた氷室だったが、ふいにその口元に小さく笑みを浮かべ、体の向きを変えた。

「数学は楽しいだろう？五木」

え？と、問いかけのまなざしを送る少女に、氷室はもう一度口を開く。

「問題が解けていくのは楽しいだろう？」

「はい！」

「よろしい」

につこり笑って答える咲良を見て、満足そうに頷くと氷室は教室から出て行った。

「うし！」

一人、ガッツポーズを作り、咲良は拳を見ながら誰も居ない教室で声を出した。

「とりあえず、目指せベスト10入り……ってね」



「それは、楽しみだ」

突然掛けられた声に、ガタガタガタと、机を揺らし、椅子を倒して咲良は振り返った。

みると、いつの間に戻ってきたのか、入り口に氷室が立っている。

「せ…先生…」

口をぱくぱくと金魚のように開ける少女を、半ば呆れたように見て、氷室は息を吐いた。

「君は、もう少し落ち着くことを覚えた方がいいな。今日はもう遅い、送っていくから校門のところで待っていなさい」

そう言うと、咲良の返事も聞かずに、氷室は廊下へと出て行った。慌てて、荷物をしまい机と椅子を直し、咲良は戸締りを確認すると、教室から出ようとして、ふと思い返したように戻ると、先ほどまで氷室が座っていた椅子へと手を置いた。が、すぐにはっとすると、自嘲気味に呟く。

「何やっているんだろう、私」

扉を閉めた、教室の中には、オレンジ色の夕日が長い影を作っていた。

## 五話

（眠ってしまっていたのか、俺は）

はつとして、顔を上げるとすぐ近くの机に突っ伏すようにして一人の少女が眠っていることに気がつく。

おそらく、課題を終えてやってきたところで、転寝している自分を起こすに起こせず、この場で待っているうちに眠ってしまったのだろう。

課題を自分の前において帰宅すればいいものを、律儀な事だと思わず苦笑が浮かぶ。

しかし、今までの自分では考えられなかった事だ。いくら徹夜に近い状態で補習用の問題を作っていたとはいえ、教室で生徒を前に居眠りしてしまうなど…。

（俺も年だということか？）

ふう、と軽く息を吐き目の前の少女へと視線を移す。

補修は三日間にわたって行なわれる。その間に問題を終わらせれば良い為、部活などがある生徒から一人、また一人と教室を出て行った。

明日、明後日は氷室の担当ではない、おそらくソレを狙ってのことだろう。生徒達に良く思われていない自覚くらいはある。

少女を起こそうとして伸ばしかけた手を一瞬止めた。

一心不乱に問題を解いている彼女を微笑ましい思いで見ている。思ったことがすぐに出るその表情は、問題を解きながら百面相を繰り返していた。その顔を思い出し、小さく微笑んだ。

部活動で見えていても、誰よりも真面目な練習態度だということが見て取れた。

何事に対しても一生懸命なその姿勢は氷室の好むところである、そう考えながら少女を起こそうと手を肩に触れた途端、思わずそれを引っ込める。

「静電気…か？」

掌を見つめて不思議そうに呟く。実際には、経験した静電気とは違う気がしたが、あえて気にはせず未だ眠ったままの少女へと視線を移し、目を細めた。

微かに微笑を浮かべて眠る姿に穏やかな気持ちと共に、何かがざわり、と動く気配がする。

再び手を伸ばし、柔らかな髪に触れようとしたとき、ポケットから微かな振動が感じられた。

（…俺は何をしようとした？）

最終下校の5分前の時間に設定してあったアラームを見て、彼は伸ばした手を少女の肩へと再び移す。

「起きなさい、五木」

彼にとつて、生徒は全て平等な存在であるというポリシーの元に、今感じた全ての感情に蓋をして。

後に彼が、この日のことを思い出しては、酷く落ち込むのはまた別の話。

## 五話（後書き）

ちょっと短いですが氷室サイドの話です。

## 六話

「あれ？咲良ちゃん？」

「りっちゃん」

呼ばれて振り返った先に見知った顔を見つけて咲良は笑顔になる。

「珍しいね、オケ部休み？」

土日、祝日を除いてオーケストラ部は毎日放課後部活動をしている。氷室に言わせると、土日も練習をしたいところだが、休日は休むべき、との学校の方針で大会前以外の特殊な事情以外、部活は全て休みである。

「あゝ、氷室先生が放課後出張だね。たまには休もうって部長さんが」

「あはは。鬼の居なぬ間のなんとやら？」

くすくすと笑う友人に咲良も苦笑を返す。

ぐうううう

真っ赤になる友人に、軽く吹き出した後、葎は鞆の中から袋を取り出した。

中にはパウンドケーキがふた切れ入っている。

「残り物だけど、よかつたら」

「うわ、りっちゃんのケーキを食べれるなんて、なんてラッキー」

「んな、大げさな」

揃って学食に行つて、自動販売機で紅茶を買つとおもむろに一口食べる。

「おいしー。しゃーわせ」

「オーバーだつてば。ありがと」

律の作るスイーツは、学年の間では有名で、裏で高値で取引されている、とまで噂されるほどだ。そんな事はないが、こうやって食べてみると、そんな噂が飛び交うのも無理はない、とさえ思う。

彼女と知り合ったのは、合格発表後の入学説明会。あまりにも少ない参加者に不安になっていた咲良に律が声を掛けたのがきっかけである。

地元の彼女の説明で、初めて咲良はこの学園の特異性を知ったのだった。

200人ほどの入学希望者で合格したのは一割足らず。それでも多いほうだと律は言う。通年なら合格者は一桁なのだと。

見極めるのに指針の一つではあるが、成績だけで合格は決まらない、と事実を疑う咲良に律は笑って言うてくれたがいまだに合格したのは何かの間違いではなかったのだろうかという考えは変わらない。

「ごちそうさまでした。おいしかったよ」

「お粗末様でした。そういえば、大変だったってね、補習」  
照れたように笑う友人に、律はおや？と首を傾げた。

「なんか、あった？咲良ちゃん」

ぎく、と顔をこわばらせる相手に解り易いなあと、こっそり苦笑を漏らす。

「なんていうのかな？前ほど氷室先生を怖がっていない、ってカンジ、かな？」

「鋭いなあ、りっちゃんは」

氷室先生の監視下での補習授業は厳しいものがある、とクラスメイトから聞いたばかりの律である。あれほど苦手としていた相手のコメントを出さないだけでも、相当な進歩じゃないかと思うのも無理はない。

きちんとルールを護れば、問題はない相手であるが、なんといつても立っているだけで冷気が漂ってきそうなタイプである。容姿が整っているためか、裏ではかなり女生徒に人気はあるが、表立って騒ぐ勇者は皆無だった。

「優しい…よね。氷室先生って」

おっとあ。

咲良の言葉に、思わず椅子からずり落ちそうになる。

入学早々注意され、入った部活の顧問であつたことが発覚した時、半泣きになったとは思えない心境の変化である。

「良い先生だなあ、っていうのは知っていたんだけどね、今回の補習でそれがとっても良く解ったっていうか、実感した」

「確かにね。良い先生だと思うよ。贅沢を言えば、もう少し軟化してくれれば授業が受け易いかな、って思うけどね」

ある種の緊張感漂う数学の授業を思い出して、律は苦笑を見せた。あの空気を楽しんでいるのは、数学が「趣味」と豪語する佐藤くらいだろう。

律の言葉に同意を示し、笑う咲良だったが、ふと遠い目をして小さく口を動かした。

「よね」

「え？」

「へ？」

目を見開いて自分を見ている友人に、わざとらしく首を振ると、律は意地の悪い笑顔を浮かべた。

「惚けるには、まだ早いんじゃないですか？咲良さん？」

「…って、りっちゃん酷い。私何か言った？」

笑いながら、立ち上がるとそのまま出口で別れる。またね、と手を振りながら首を傾げる友人を見送って、律もまた首を傾げるのだった。

「『懐かしい感じがするんだよね』か、無意識に呟いたみたいだけど、デジャヴ、なのかな？」

後に、この言葉の重さを思い知る律であった。



## 七話

部長であり、指揮者である船橋のタクトが静かに下りていった瞬間、ホールの中は割れんばかりの拍手と喝采の嵐が巻き起こった。学生に混じって多くの来賓や外部からの招待客が立ち上がって「ブラボー」と叫んでいる。

咲良にとって初めての大きな舞台、オケ部の文化祭の定例公演は、こうして大成功の中幕を閉じた。

「みんな、ありがとう！」

控え室に戻った部員達に、船橋は半泣きに近い表情の笑顔に向けた。それに部員達も笑顔で応える。

「相良、お疲れ様。ソロパート、素晴らしかったよ」

コンマスであり、バイオリンのソロを演奏した相良に近づくと、彼女はニコリ、と優雅に笑顔を返す。

「私よりも彼女を褒めてあげて」

突然頭を撫でられて、「へ？」という表情で顔を上げた咲良に、船橋は嬉しそうに頷いた。他の部員達も納得したように頷きあう。

「この短期間で、よくあそこまで頑張った。正直今年はフルートは諦めていたんだ。君の努力に敬意を評するよ、五木」

船橋の言葉に、咲良はぶるぶると首を振った。

「とんでもないです、私なんてみなさんの足を引っ張ってばかりで……氷室先生にも最後まで怒られっぱなしでしたし」

「大丈夫。氷室先生は見込みのない相手に怒りはしないわ。なににより、フルート初心者の貴女が、わずか半年足らずでここまで吹きこなすようになるには、相応の努力をしたはずよ。私達は、その努力に敬意を表するわ」

「相良先輩……ありがとうございます」

頭を下げる咲良に、周囲から拍手が贈られる。涙ぐむ彼女を船橋がよしよしと頭を撫でた。

西陵学園には中等部にもオーケストラ部がある。ここの部員達も、殆どが在籍者であった。しかし、4月の時点で十数人いた高等部の新入部員は、現在咲良をあわせて5人である。辞めた理由は言うまでも無い氷室の厳しい指導に付いていけなかったからだ。

残ったのは弦楽器4人とフルートの咲良だけ。フルート奏者は現在3年生の生徒が唯一人いただけだったが、彼女は外部の大学志望のため、夏休み前にすでに部活を引退していた。

「朝倉先輩が一生懸命教えてくださったからです。夏休み中もちょくちょく顔を出して、指導してくださいましたから」

引退したフルートの担当者の名前を挙げて、彼女は笑顔を見せる。謙虚な態度は部員達に微笑ましさと共に困惑を与える。彼女を指導した朝倉が感心していたのだ、一度注意したところは二度と注意させない、と。

「放っておくと相当無理をしそうなタイプよ。気をつけてあげてね」

がらり、と扉が開く音がして、部員達の視線が集まる。顧問である氷室が、彼には珍しい笑顔たたえていた。

「すばらしかった。君達を誇りに思う」

ぱちぱちと拍手をする顧問に、生徒達は恥ずかしそうに顔を見合わせた。

普段厳しい氷室だが、終わった後、例え失敗したとしても、頭ごなしに起こるようなことはしない。ただ、静かに反省点と注意点を与

えて去っていくのだ。

そんな顧問の態度のほうが自分達には堪えると、部長の船橋は言う。だからこそ、自分達ができる最大限の努力をするのだと。

「今日のキミの音は特に抜きん出ていた」

相良に向って手を差し出す氷室に、彼女も涙ぐむ。

「年明けの大会が今から楽しみだ」

その一言で、浮かれていた部員達に緊張が走った。やはり、氷室は氷室だと、心の中で感じる咲良であった。

「残りの時間はそれぞれ楽しみなさい。『遊ぶ時は遊ぶ』これも学園の方針の一つだ。反省会は日を改めて行なう。以上」

『はい！』

楽器を手入れし、片付け三々五々散っていく生徒を見送りながら、氷室はフルートをケースに収めた咲良に近づいていった。

「五木」

「あ、は、はいっ」

「よくやった」

滅多に見ることができない顧問の穏やかな笑顔に少女が目を見開き、ついで満面の笑みを見せる。

一瞬眩暈に近いものが氷室を襲った。

「ありがとうございます。先生や先輩方のご指導のおかげです」

「あゝああ。それもキミが努力しなければ実を結ばない。これから頑張るなさい」

はっと我に返り、氷室は改めて生徒である少女を見下ろした。

「はい」

眩しいものでも見るような氷室の視線に首を傾げた咲良だったが、普段と代わらぬ物言いの相手に、それ以上口にする事無く、頭を下

げて教室を離れていった。

「…五木」

「はい？」

振り返った生徒に、氷室自身どうして声を掛けたのか解らず、一瞬言葉を詰まらせたが、すぐにいつもの表情に戻る。

「クラスの当番は終わったのか？」

「いえ、明日の担当です」

受け持つクラスは、チャリティーバザーをやっている。部活動のある者はそちらを優先させる事になっていた。

「そうか、頑張りなさい」

はい、と返事をして再び頭を下げ控え室を去っていく後姿を見ながら、氷室は軽く息を吐く。

何故呼び止めてしまったのか。

一瞬頭を過ぎった疑問は、船橋に呼ばれたことで綺麗に霧散していた。

## 八話

「氷室さんの補修受けたことがあるんだ、羨ましいな」

試験前、葎の中学の時の先輩だという柴田に勉強を教わっている最中に彼から言われた一言が話のきっかけだった。

ちなみに、場所は何故か生徒会室。今日は役員が休みで空いていたから、とは柴田の台詞である。

彼は先日代替わりしたばかりの生徒会長でもあった。

図書館は一人で勉強するにはむいてはいるが、誰かに教えてもらうとなると、やはりある程度話せる場所の方が好ましい。

葎に言わせれば、柴田はただ単に飲み食いしながら教えたいだけなのだそうだ。

「受けたかったら、今年度留年って手もありますよ？原則として三年間同クラス、同担任なんですよね？」

「恐ろしいことをサラッというね、お前」

お茶請けは葎が作ってきたクッキーだ。抹茶風味のそれは日本茶にも良く合う。

「氷室さんは凄いよ。何の教科でもよどみなく教えることが出来る。去年、一度だけ代理で授業したのを受けたけど、畑違いの社会：歴史なんだが、いろんなことを知っていて実に楽しい授業だった」

補修の時のプリントを思い出して、咲良は頷く。あの時自分は数学

と物理、それに英語だったが、どれも的を得た解りやすいものであった。

「総合的な学科の知識が必要で、専門学科を卒業しなければ付けない小学校や中学と違って、高校教師は教職課程さえ取っていれば、誰でも、って訳じゃないが、教師になることができるんだ」

ちよつと休憩な。と笑つて、柴田は葎から緑茶を受け取り、一口飲むと幸せそうに息を吐く。

「やっぱり、葎の淹れるお茶は最高だな。嫁に来ねえ？」

「彼女に言いつけますよ？」

につこりと笑顔で答える後輩に、それだけは勘弁、と柴田が謝る。

「へえ、柴田先輩、彼女がいらっしゃるんですか？どんな方です？」

「もったいないような美人さん。話し振らないほうがいいよ、惚気しか出てこないから」

嬉々として話そうとした柴田を、葎が押さえる。しゅん、と項垂れた柴田に苦笑を向けながら、どんな彼女だろうと咲良は考えた。

学年トップの成績を誇る柴田は、全国模試でも常に上位に名を連ねている、と聞いたことがあった。運動はいまいちだが、ルックスは悪くない。

自分の周りにも柴田のファンは多い。加えて、気さくな性格だ。人気が高いのも頷ける。

「で、さっきの話。氷室さんの教え方って、天才の教え方じゃないんだ」

不思議そうな表情の咲良に、柴田は起用にウインクをしてみせる。

「天才っていうのは、自分が何もしなくても理解できるから、相手がどこをどうして判らないか、どうやったら相手に理解してもらえるかが解らないんだ」

なるほど、と感心する。

「じゃあ、先輩も『天才』じゃないんですね。教え方が凄く解りやすいですから」

「先輩は『天才』だよ。一を聞いて十を知る人」

あつさり帰ってきた律の返事に、咲良は首を傾げる。

「俺の場合、彼女のために……だな。あいつ難しい話を聞きたがる割に理解しないから、噛み砕いて説明する事になれているんだ」

『天才』の言葉を否定しない柴田に突っ込むべきか、一瞬悩んだ律は、そのまま口を噤む方を選んだ。

「……でも、そつか。やっぱり凄いですね、氷室先生って」

ふわり、と微笑む少女に二人は同時に軽く眉を寄せるが、すぐに表情を元に戻した。

これにて本日は終了。

柴田の一言で、勉強会は幕を閉じ、咲良は頭を下げて生徒会室を後にしたのだった。

「……気がついたか？」

「まあ……本人無自覚ですね。氷室先生もてますから、今更『懂れる』生徒が一人や二人増えても問題は無いんじゃないですか？」

淹れなおされたお茶を静かに口に運ぶと、柴田は深々と息を吐いた。

「知っているか？この学園、生徒同士の恋愛は勿論、教師との恋愛も禁じてはいないんだ」

「自分の責任の範囲内なら、ですよね」

人が人に想いを寄せるのは人間として当たり前の事。だから、表向きに恋愛に関して寛容な態度を取っている。…あくまで、表向きではあるが。

「18歳未満は法律があるからな。それに教師と二人きりで『社会見学』という名前のデートをしたって問題は無いさ…だが、色々と差し障りがでるから、学校側も動く」

「差し障り、ですか？」

首を傾げた後輩に柴田は頷いた。

「クビにはならないが、移動は確実だ。中等部や大学に一時的だが飛ばされるな。今の五木さんのように自分の努力で成績を上げたとしても、教師と付き合っている、という事実がある以上邪推する奴は、いくらでも出てくる」

ああ、と葎は苦い笑いを口の端に乗せた。事実はどうであれ、ひとつ間違えれば、試験問題の漏洩になりかねない、という事なのだろう。

「さっきの葎の台詞じゃないが、氷室さん、ガードが固いから心配はしていないさ。…ただ」

問う眼差しに、柴田は軽く肩を竦める。

「あの人も、あいつらと一緒に懐に入れた相手には甘そうだからな」

柴田の言う「あいつら」の顔を思い出し、葎の表情が微かに歪んだ。

後に彼のこの懸念は別の方向で当たる事になるのだが、この時の彼らにそれを知る由は無かったのである。



## 九話

土曜日の昼下がり、咲良は学校に来ていた。

『休むときは休む』がモットーのひとつである西陵学園ではあるが、生徒のために施設の一部を開放していた。9時から16時までの間なら、守衛に学生証を提示すれば学内に入ることができる。

勿論、セキュリティの為出入りはきちんとチェックされるが、一般の教室は施錠されて入ることはできない。なんらかの理由で忘れ物をして取りにいきたくても、忘れた方が悪いと（体調不良などで早退した場合は担任か近隣の生徒が責任を持って荷物やプリントを持つていく）入室を許可されないのだ。

この日彼女は『図書館の主』と呼ばれる友人から、気になっていた新刊が入荷されたというメールを受け取り足を運んだ。

発売が予定されてからずっと気になっていた本を手にして、高揚した気分で図書館を出たとき、微かに聴こえた旋律に首を捻り、音源の方向へと足を進める。

静かなその音色はバイオリンのもの。高く低く、聴き慣れた旋律は「la Campanella」パガニーニのバイオリン協奏曲だが、リストがピアノ用に編曲した方が有名な曲であった。技巧を凝らした曲としては、ピアノ、バイオリン共に、難易度の高いその曲だったが、流れるようなよどみない曲の流れから、奏者が相当な力量だと思い知る。

「誰が弾いているんだろう。相良先輩の音とも違うみたいだし」

首を傾げながら音源へと向う彼女は、気付いていなかった。  
近づいているはずなのに、少しも変わらぬその音量に。

音楽室の扉の小窓から見える姿に咲良は固まってしまった。

（氷室先生？）

バイオリンを奏でるその姿は、いつもの彼からは思いもよらぬ柔らかな気配が漂っていた。

（凄い…）

専門外の彼女でもわかる指使いの匠さ。弓使い。  
同時に沸き起こる微かな嫉妬と独占欲。誰にも見せたくない、聴かせたくない。そんな気持ちに戸惑い、自覚する。自分の想い。

その瞬間。

それは咲良の内に入ってきた。  
溢れるほどの恋情と記憶。遠い昔封じられていた一族の血。  
ふらつく体を支えられず思わず扉に体を支える。

「誰だ？」

訝しげな響きを持った声と共に開けられた扉。支えた体がついていかず、思わずよろめいてしまう。

「五木？」

掛けられた声に体中が歓喜で震えた。

「こんなところでどうした？」

驚いたように見開かれた瞳を別の意味にとったのか、氷室は軽く眉を寄せて、扉に体を預けたままの彼女に身をかめた。

「気分でも悪いのか？だとしたら、突然扉を開けて……！！  
五木！」

息を飲んだ声とともに、咲良の頬を温かいものが覆う。それが氷室の掌だと気付いた途端、心の中に沸き起こる幸せな気持ちと同時に、男の声に何かがすう……と冷えていくのを感じた。

「何か、あったのか？」

いつもの男と変わらない声の調子。咲良が泣いているせいで多少慌てた感じではあるが、その中に、彼女が望んだ色は見出せなかった。「申し訳ありません……大丈夫、です」

震える声をなんとか絞り出して、彼女は体を立て直す。同時に何気なさを装って、男の手から身を離れた。

「ご心配をおかけして済みません。先生のバイオリンの音に酔ったみたいです」

感情が荒れるまま男に掴みかかっていきたかった。「何故？」の言葉が頭の中に荒れ狂っている。

それをぎりぎりの所で押しとどめているのは、封じられるまで続けられていた一族の教えによる矜持。

「バイオリンを弾かれるなんて知りませんでした。とても素敵な音色でした」

「……あ、ああ。ほんの手慰みだが。ありがとう」

そろそろ限界だ。そう感じて、咲良は深々と頭を下げた。

「失礼します」

「気をつけて帰りなさい……。いや、送っていこう。校門で待っていないさい」

行きかけた少女の体がびくり、と揺れた。一瞬の間をおいて、咲良

はゆっくりと振り返る。

「ありがとうございます。ですが、母が迎えに来てくれますから」  
もう一度頭を下げると、階段へと消えていく少女に、氷室は声を掛けることが出来なかった。

胸の中に湧き上がる言いようの無い寂寥感と、何かもぎ取られたような気持ちに目を向けることは出来なかった。そのまま、廊下の窓から外を見て大きく息を吐く。一人の、しかも女生徒を特別視することは良くない、と自分に言い聞かせ、バイオリンを片付ける為に音楽室へと戻っていった。

お互いに混乱していた為、彼らがそのことに気がついたのはずっと後のこと。

音楽室は完全防音の為、例えオーケストラ部が練習していても音が外に漏れるのは、よほど音楽室に近づいた時以外ありえない、ということに。

その気配に、生徒会室にいた三人は、仕事の手を止め三様に表情を変える。

一人は不快も露に、一人は呆れたように、また一人は何処となく怒

りを滲ませて。

「顕著だな」

「柴田がいれば、少なくともここまで感じることは無かったと思うけどね」

「護り、でしょ？一気に膨れ上がった感じだけど問題ないんじゃないの？」

「どうだろうね？今まで無かったものが急に現れただけで、警戒の対象にはなる気がするけれどね」

「・・・とりあえず、静観しておこう」

中に含まれる意味合いは異なるが、それぞれに重い溜息を吐き彼らは作業を続行させた。

## 十話

泣きつかれて眠ってしまった娘に痛ましそうな視線を投げかけて、母親は大きく息を吐いた。

気配に気がついて扉に目を向けると、息子が心配そうな表情でこちらを伺っている。安心させるように笑顔を向けると、ほっとした顔をして自分の部屋に戻っていった。

開いたままの扉が軽くノックされ、夫が顔をのぞかせる。頷きを一つ返すと、傍に置いてあった洗面器でタオルを濡らし娘の目の上においてやる。与えられた冷たさに身じろぎして、少女は体を起こした。

「起こしちゃった？ごめんね」

「・・・大丈夫」

タオルを目に当てたまま応える声は微かに震えていた。無理も無い。

「『里』に問い合わせた。どうする？後にするか？」

父親の心配そうな声に、一瞬言葉を詰まらせ咲良は首を振った。

「うっん、聞く」

「そうか。下に来れるか？」

頷く娘に「先に行っている」と父は階段を降りて行った。

自分も聞く、と譲らなかつた弟を交えて、彼らはリビングのソファに腰を降ろした。姉の横に陣取つてその手を握る弟に咲良は小さな笑顔を向けた。

大丈夫。

弱くはあるが握り返してくる姉の手に、彼はもう一度力を入れる。

子供達のそんな様子を、微笑ましさ半分、哀しさ半分の気持ちで見ている両親だったが、最初に口を切つたのは父親だった。

「咲くんだが・・・確かにお前の『半身』だ。これは間違いない」  
「なら、どうして『目覚め』ないんだよう！」

「落ち着きなさい、聡さとし」

息子の荒げた声を母親が嗜めた。

「長老・・・咲くんのおじいさまに当たる方だが、彼に言わせれば、咲くんの性格に端を欲しているのだろっ、ということだ」

「なにそれ？意味解らないんだけど」

大きく息を吐くと、父親は娘へと視線を移す。

「最初に目覚めた時が6年前。咲也の葬儀の晩・・・お前が9つ、咲くんが18。時期尚早と長老が術を掛けお前達を離した」

もっと早ければ、もっと遅ければ、もしくは二人の年齢がもっと近ければ問題は無かつたかもしれない。しかし、どれをとつても中途半端でしかなかった。

彼らが里に住んでいれば、話は別であつただろうが、志望大学に進学を決めたばかりの息子を見て、反対したのは氷室の両親だった。

「本人に話せば、大学進学を蹴るか、一年待つて近隣の大学に進学すると言つただろうけどね。桜杜の男は皆そうだろう？」

苦笑を向ける父親に聡は顔を真つ赤にして頷く。早くに半身と巡り会つた少年は、引越しが決まつたとき最後まで里を離れることを嫌

がったのだ。

「今回の引越しは、表向きは私の転勤だが、一族経営の会社でそれ  
はありえない。一つは、聡、君の為。キミと瑠璃の為。それは解る  
ね？」

「近くにいるとお互い底い合って、依存してしまうから、だろ？ 2  
年離れてみて良く解った」

大人びた離し方をする息子に、父親は苦笑を深いものに変える。そ  
れでも、彼らは毎日のように電話をし、メールを交わしているのだ。  
自分達もそうだったが、半身を持つ者の結びつきと執着は半端では  
ない。男性の場合特に強い。それは、長年連れ添ってきたにも拘ら  
ず、今も変わらず自分の中にある。

「そして、もう一つは咲良のため。あの学園に暁くんがいると知っ  
ていたからね」

「・・・そう、だったんだ」

俯く娘に母親が笑顔を向ける。

「いっておくけど、入試に不正は無いわよ。それがあの学校のポリ  
シーですもの。合格すればめっつけもの、とは思ったけどまさか本当  
に受かるとは思わなかったわ」

さりげにひどいことを言う母親に、姉と弟は複雑な顔をあわせた。

「だが、今となってはそれが良かったかどうか・・・だな。まさか、  
それが枷となるとは思わなかった」

「どういうこと？」

妻の言葉に夫は息を吐くと、ソファに体を預ける。



「真面目すぎる彼の性格だよ。一生徒・・・ましてや女生徒に特別な感情を寄せることなどもつてのほか、というね。教師と生徒という立場が彼の最大の枷となっている」

恋心を自覚したとたん、あっさりと解けてしまった咲良とは異なり、彼は無意識のうちに自分自身に封印していたのだ。

「先程一族の一人が調べに行つて呆れていたよ。無自覚の癖に堅牢な結界を学園に張っているんだ・・・彼は。半身を守る為に、ね」とたんに顔に血が昇るのを自覚する。先程まで励ます為に繋がれていた聡の手が離れ、軽く姉の腕を突付いていた。

子供達の姿を見て、両親は微笑み合う。しかし、すぐにその顔を真面目なものに変えた。

「暁くんの封印を解く事は難しくはない。すでに『目覚めて』いるのだからね。お前が生徒で無くなればいいだけだ」

「それは、転校する、ってこと？」

咲良の表情に複雑な色が混じる。離れがたい友人も多く出来た。転校することで彼らの友情が壊れることはないだろうが、疎遠になることも確かだろう。

「どちらにしても、聡の小学校卒業とともに戻るつもりでいた。お前の高校の卒業と同時期だからね」

「それまでに暁くんが自覚するか、貴女が待つか、よね？」

二年になって間が無い。あと二年近く彼女は自分の気持ちを隠し続けなくてはいけない。そうでなければ氷室に迷惑が掛かってしまう。遠巻きにされているとはいえ、氷室の人気は咲良も良く知っている。一族の運命に胡坐をかけるほど自分に自信などありはしない。

「2、3日考えて見なさい。学校には体調を崩したと欠席の連絡を  
いれておくから」

ぽん、と肩を叩く母親の顔を見て咲良は頷いた。

## 十一話

結局三日休んでも、自分自身の結論は出なかったもので、これ以上休んでいても何も解決しないと、学校に足を運んだのは木曜日だった。休んでいる間、氷室が様子を見に来てくれたらしいが、母親が玄關で対応してくれたので会わずに済んだ。

氷室に会った母が、「二人の良い所ばかり貰ったイケメン」と評価して、父を拗ねさせてしまったのは笑い話になりはしたが。

相手は担任、どうしたって、顔をあわせずには居られない。緊張もあつて、いつもより相当早い時間に家を出てしまった。

運動部の朝練で出てきているもの以外、人気のない校舎内を歩いていると、向こうから生徒会の役員が歩いて来るのが見えた。

咲良に気がついて、彼らが足を止める。頭を下げて通り過ぎようとした瞬間声が掛かった。

「桜護<sup>さくらご</sup>の片翼<sup>かへう</sup>か」

足が止まり顔を上げると、渡辺と井上が不快そうな表情をして、傍らに立つ久遠は困ったような顔をしていた。

「…護りではないな。そうすると、この結界はもう片方か。誰だ？」  
渡辺の厳しい物言いに一步後退さる。すると、行く手を阻むように井上が動いた。

「余り勝手なことをしないでほしいんだけど？」

穏やかな人格者が揃っているとの評判の今期の生徒会役員からは想像もつかない態度に、咲良の顔が青ざめる。

「友人が何か？」

聞き覚えのある声にはつとすると、葎と亜衣、それに佐藤が立っていた。一歩進み出て佐藤が咲良の腕を取って自分達のほうへ招き寄せた。

「葎」と渡辺が微かに呟き姿勢を正した。

「友人？お前のか？」

威圧的な声音は、普通の生徒ならばすぐみ上がってしまっただろう。しかし、前に居る三人の後輩は至って冷静な表情をしていた。

「はい、極親しい友人の一人です。彼女が何か？」

こちらにも、いつもの葎からは想像のつかない冷たい声だった。

暫くの沈黙の後、最初に口を開いたのは久遠だった。

「止めましょ。りっちゃんたちを怒らせてまでのメリットはどこにもないわ」

「だが、片翼がわかならいままじゃ、落ち着かないだろう？」

応じた井上に渡辺が大きく息を吐いた。

「桜杜を知らぬわけではない。：しかし、こんな中途半端は初めてだ。不可解だな、あの『桜杜』が」

ふ、と口を噤み「ああ、そうか」と呟いた。

「ナベさん？」「ナベ？」

友人二人に軽く手を上げると、渡辺は葎に向き直る。

「不可侵を貫こう。しかし、度を過ぎれば黙っては居ない。解るな？俺とて薄氷を渡る気分にいるんだ」

「落ちたって先輩達みたいに心臓に毛が生えているような人なら、死にはしません」

「…ひどいよ、御崎さん」

ワザとらしい、哀れみを誘う声で井上が言い、最後に久遠が咲良に「ごめんね」と謝って、彼らは去って行った。

「さて、教室に行くか？」

佐藤が声を掛け二人が続く。はつとして、小走りに咲良が彼らに追いついた。

「りっちゃん…あのね」

足を止めて、律達が振り返る。苦笑交じりの笑顔は咲良にそれ以上語ることを許さなかった。

「聞いたら関わらなくちゃいけないから遠慮しておく」

佐藤があっさり言う classroom に入っていく。それに続きかけた律だったが、足を止めると、今度はいつもの穏やかな彼女の笑顔を見せた。

「片思いの醍醐味っていうのも、いいもんだよ？」

え？と目を見開いた咲良に「またね」と手を振って、亜衣と共に彼女も自分の教室へと入って行った。

自分のクラスで席に着くと、咲良は窓の外を見る。そろそろ、交通機関の都合で早い時間に来る生徒達がちらほら登校する頃だ。ふと気がつくと、氷室が校門のほうへと向っていく姿が見えた。時折彼は校門に立って、生徒達の登校を迎えることがある。思ったほど痛まない胸に、さきほどの律の一言が蘇った。

「片思いの醍醐味、かぁ」

自覚したら、すぐ両想い、が「桜杜」の一族だ。だから、片思い、などという言葉とは縁が無い、ともいえる。

「そうだね。それもいいかもしれない」

心の中にあつたもやもやが晴れていった。そんな気分だ。

「あれ？五木さん、もういいの？」

いつも早々と登校するクラスメートが教室に入ってきて声を掛けた。

「あ、おはよう。うん、ありがとう、もう大丈夫」

HRの為、教室にやってきた氷室は、そこに咲良の姿を見つけて、ほつと息を吐く。朝校門で立っていたが、彼女の姿を見ることが出来なかった為、今日も休みかと思っていたのだ。

彼女の姿を見て安心する自分に、無意識に『生徒』の心配をすることは当たり前だと考え、出席をとる。

「大丈夫か？」と少女に問えば、「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」と返ってきたので、軽く頷いて続きの名前を呼んだ。

もし、このクラスに葎や佐藤、亜衣が居たならば気がついていたらかもしれない微かな気配の変化。

昨日までの氷室より柔らかな様子は、少なくとも彼のクラスの誰も

咲良でさえ 気付くことはなかった。

後になって、お小言と笑い話になる渡辺との会話や、葎たちの行動

だが、氷室を目にした途端、綺麗さっぱり忘れてしまった咲良に非はない……多分。

## 十一話（後書き）

これにて、一章終了です。お付き合いくださった方々に感謝を。活動報告でも書きましたが、暫く「桜媛」はお休みさせていただきます。

お氣に入りに登録してくださっている皆様にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。

氣長にお待ちいただけると（こればかりだわ、自分）幸いです。



## 十二話

桜の花が舞い散る。

一瞬、風に視界を奪われる。  
湧き上がる恐怖。花が彼女を奪っていく。

視界が開け      男の世界が、静かに形を成して行つた。

いつも聞こえるはずの声が無いという事は、こんなにも不安を呼ぶことなのだろうか。

自由参加の社会見学の当日。

朝、点呼を取った時には返事があつた。

いつもの彼女ならば、折に触れ質問などをしながら、もしくは友人と話しながら見学するはずのだが、今日はその声が聞こえない。時折気になって振り返ってみると、確かに少女はそこにいるが、いつも興味深げに周囲を観察しながら、変えているその表情に覇氣がないように思える。

引率者として、生徒の健康には気をつけなくてはいけない、と考えつつも、それだけではない何かが、自分の中にあることに彼自身気が付いていた。

だが、それは自分が気に掛けている（言い方としては、不本意ではあるが）「お気に入り」の生徒に対して、他の者達よりも注意がいつてしまう。

ただそれだけだと、自分自身で納得していた。

だからこそ、見学が終わって彼女に声を掛けた時、自分が何をしようとしているのかと、半ば呆れてしまった位であった。

車の中で、何処に行くのかと少女が訊いてきたときも、つい「秘密だ」と、意味ありげに言うことであっただろうかと考えてしまったほどだ。

だが、彼の好きなこの場所で、彼女の顔が元気になっていくのを見るのは嬉しかった。

自分が好きなこの場所を、気に入ってくれたのも嬉しかった。満面の笑顔を自分に向けてくれたことが誇らしかった。

柔らかな夕日と、周囲の雲が一刻一刻すがたを変化させ、気が付けば、辺りは薄闇に包まれていた。

その帰り道、少女の少し寄りたいたいところがあるという言葉に、時間的に多少問題があると思いながらも、ハンドルを切ったのは、自分自身がこの余韻にまだ浸っていたいからだ、と、苦笑せざるを得なかった。

（何を考えているんだ俺は。相手は自分の生徒だぞ）

街から少し外れたそこは、一面に桜が植えてあった。

染井吉野だけではない、少し赤みが買った山桜、白の色が強い大島桜に緑萼桜。まだ咲いていないのは八重桜であろうか。  
枝垂れ桜のイトサクラ、シダレヒガシなどもある。

「こんなところに、これほどの桜の名所があったとは…」

氷室の呟きに、咲良は微笑んだ。

「この辺り一帯が個人の土地ですから、普段は入れないんです」  
実は知り合いの土地なんですけどね。と、いたずらっぽく笑う彼女について笑う。

「あの場所に連れて行ってくださったお礼…になるかどうかわかりませんけど」

「ありがとう」

氷室の礼の言葉に、咲良は微笑んだ。

時折彼女が見せるその笑顔は、どこか大人びた翳を垣間見せるものであった。

しかし、氷室と目が合う瞬間にはいつもの、年相応の笑顔の戻る。  
それを、どこかで残念に思う自分が居ることを、彼は自分で気が付

いていた。

大きく息をついて、自分の中の感情を無意識に押しつぶすと、氷室は咲良の方へと顔を向ける。

「さあ、もう遅い、そろそろ……」

その時、春の嵐のような風が二人の間を吹きぬけた。

## 十三話

それはずるい、と男が笑う。

そうでしょうか？と少女が微笑む。

考えてもみなさい。と、男がいつもの口調で、だが甘い声で囁く。

君は一人で、この感覚を堪能していたのだから。

でも…。と、少女は口を尖らせ、甘えた声を出す。

でも、寂しかったんですよ。

視界が遮られる。

あたり一面の桜の花びら。

暗闇の中、それは、吹雪にも似て。

男は不安にかられた。

彼女が居ない。

彼女が何処にも居ない。

まるで、真白き闇に一人取り残されたような。

真白き闇が彼女を連れ去ってしまいたいそうな……。そんな恐怖が彼を包んだ。

「…五木？」

男の呼び声に応えは無い。

「五木!？」

あるのは、一面の桜吹雪。

「五木…咲良? 咲良!？」

「先生？」

その時視界が開き、男の世界が形を成した。

押し寄せる幸福感。

白い闇だったそれは、彼女を護る楯となり、少女をとりまく。  
在るべきものは在るべき所に。

桜の下で舞う幼子の姿。彼女を取り巻く淡い光。

「先生？」

どこか視点の定まらぬ顔の男を、心配げな瞳が見上げる。  
ゆっくりと視線を下げ、男は少女を見下ろす。

「さく…ら？」

「はい？」

名前を呼ばれ、少女の声に訝しさが混じる。

「桜：媛？」

大きく目を見開き、ついで花が綻ぶように嬉しげな少女の笑顔。

「はい、暁さん」

男は目を細め、少女を引き寄せる。

「すまなかった」

ふるふると首を振ると、色素の薄い髪が揺れる。そこにゆっくりと唇を寄せ、氷室は腕の中の少女をいつそう強く抱きしめる。

「咲良」

愛しげに少女の名を呼ぶ声は、普段の男を知っているものであったら信じられぬくらい甘い。

「はい、暁さん」

答える少女の声が柔らかく男を包む。

「咲良：俺の桜媛」

護人の腕の中、少女はそつとその胸に頬を寄せる。

そして、彼らは両翼となる。



### 十三話（後書き）

殆ど手直しせず、以前の原稿を転記しました。

一旦「桜媛」をここで終了させていただきます。

いつか、じっくり腰を据えて最初から書き直していきたいと思っています。

お気に入り登録をしてくださった方々に心からの感謝を。

中途半端な状態で放置するよりも、どんな形ででも終了させたくてこのような終わり方をしてしまったことに、お詫び申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9692r/>

---

桜媛

2011年9月9日10時27分発行